

次の課題文を読んで、設問 A、B に答えなさい。解答は解答用紙の所定の欄に横書きで記入しなさい。

〔課題文〕

カフェでじっとチョコレートケーキを見つめている小さな女の子を見かけ、あなたは考える。「あの子、あのケーキが食べたいんだな」。このとき、あなたはその子のふるまいを解釈した。つまり、志向的状态（この場合はケーキを食べたいという欲求）を帰属することで、彼女のふるまいを説明したのである。誰かの行っていることを理解しようとする場合や、次に行うことを予測しようとする場合、私たちは相手を志向的行為者とみなす。そして相手の動作や発言の裏に、それを動機づける志向的状态があるものとする。こうした志向的状态にもとづいてふるまいを予測・説明することは、解釈という実践にふくまれる。以下のような例を考えてほしい。「あのウェイターが親切なのは、チップがたくさんほしいからだ」。「あの男の子が興奮して飛び跳ねているのは、おばあちゃんにおもちゃ屋へ連れて行ってもらえるからだ」。「あのチームのコーチは、ミッドフィルダーを下げてストライカーを出すだろう。試合はもう終わりかけで、自チームはゴールを決めないと勝てないのだから」。

（中略）

さてここで、2 人の哲学者の名前をあげたい。彼らの研究内容は明らかに異なっているが、重なり合う部分も有している。1 人はドナルド・デイヴィッドソン。もう 1 人は、ダニエル・デネット。両者とも、私たちが誰かのふるまいを解釈するプロセスに関心をもっていて、そのプロセスの本質的な側面をとらえようとしたのである。では、彼らのコミットした見解はどのようなものだったか。ある人がある信念や欲求をもっている、と正しく述べられるためには条件があるが、彼らによるとその条件の 1 つは、解釈の可能性によって与えられる。すなわち、もし適切な位置におかれた解釈者がいたなら、その人はまさにその信念や欲求をもっていると解釈されるだろう、ということが条件となる。さらに彼らによると、解釈者はある決まった前提のもとでしか、志向的な言葉を用いてふるまいを説明・予測することができない。そのなかでも中心的とされるのが、相手は合理性の基準を満たすようにふるまっている、との前提なのだ。以上の主張へのコミットメントを基本的な理念とするのが、解釈主義——解釈の実践を見ることで、志向的行為者性の本性がわかるという見解——である。

では、解釈主義者たちが考える合理性とはどのようなものか？ デネットの論文「本当に信念をもつ者たち」（1981）での説明によると、ある行為者が合理的といえるのは、もつべき信念と欲求をもっており、なすべきことを行っている場合である。ここでの「なすべきこと」は、自分の目的を達成するためになすべきこと、という意味であり、それは行為者の信念と欲求によって変わって

くる。それでは、行為者がもつべき信念と欲求とはどのようなものか。これは論争を呼ぶ話題だが、デネット自身の提案はこうだ。ある行為者が合理的であるためには、自分が知りうる範囲にあり、かつ関心をもっている真理をすべて信じねばならない。さらに、何かが自分にとってよいものだと思ったならば、それを欲求せねばならない。志向的システム理論とよばれるデネットの理論においては、このような意味での合理性が必要不可欠な前提とされる。その人が合理的であることを前提しなければ、人のふるまいを予測するべく方針を立てることはできないというのだ。

デネットによると、人が他者のふるまいを予測するために使う方針は3種類ある。まず、物理的スタンス。このスタンスをとることで、予測したいシステムのふるまいについては一定の洞察が得られるが、そこで参照されているのは、システムの物理的な組成、システムに影響する可能性があるものの物理的本性、および物理法則の知識である。観察者がこの方針をとるのは、水が何度で沸騰するか、日曜日に雨は降るか、といったことを予測するときだ。次に、設計的スタンス。この方針でシステムのふるまいを予測する場合、そのシステムがどうふるまうように設計されたかがポイントとなる。観察者が設計的スタンスに立つのは、目覚まし時計がいつ鳴るのかを予測するときや、パソコンのキーボードのESCキーを押したら何が起こるのかを予測するときだ。こうした出来事を予測する際に物理的スタンスをとり、目覚まし時計やコンピュータの物理的組成に注目することもできる。だが、このようなシステムは複雑だから、設計的スタンスのほうが便利だし経済的なのだ。ただし、もしシステムに誤作動が生じたならば、物理的スタンスへ立ち戻らないといけなくなる。それはシステムが設計通りにふるまわなくなった、ということなのだから。そして最後に、志向的スタンス。これを使うためには、ふるまいを予測したい対象のシステムを、志向的状态をもった合理的な行為者とみなしていなければならない。ゆえに、解釈者には考えねばならないことが出てくる。たとえば、対象のシステムの目的を前提したとき、そのシステムはどのような信念と欲求をもっているべきか。こうしたことを考えてはじめて、そのシステムが目的を達成するべく、帰属された信念と欲求にそってどう動くかが予測できるようになる。この文脈において、解釈者はある特定の意味で対象の合理性を前提している。つまり、対象のシステムがもつべき信念と欲求をもっていると前提している。そして、その信念と欲求を前提したとき、システムが目的を達成するため行うべきことを行うとも前提している。解釈の対象が人の行為者のふるまいである場合、この志向的スタンスがデフォルトの方針となる。

原則としては、1つ目と2つ目の方針、すなわち物理的スタンスや設計的スタンスで人のふるまいを予測することも可能である。だがそれでも、志向的スタンスが余計だということにはならない。ここでデネットは以下のように論じている。外部からやってきて人のふるまいを観察する存在、たとえば好奇心旺盛な火星人が仮にいたとしよう。もしこの火星人が志向的スタンスをとらなかったとしたら、おそらく大事なことを見落としてしまうだろう。火星人が認識できるふるまいのパターンのなかには、志向的スタンスでの一般化と予測を支えるパターンがふくまれていないので

ある。物理的スタンスや設計的スタンスをとり、物理的な組成や生物学的な機能だけで考えたせいで、火星人は人のふるまいを最もシンプルに説明することができなくなってしまった。そして、人がお互いを理解し、相互に協力することを可能にしているパターンを見抜くこともできなくなってしまったのだ（例：人は悪いニュースを聞くと悲しくなる。ディナーに招待された人は、おそらくワインとかチョコレートを持参する。バス停の横に立っている人々は、バスがもうすぐ来ると信じていて、来れば乗れるとも信じている）。

志向的スタンスでふるまいを予測することは、どのような個体に対しても可能ではある。じっさい、ペットや植物、時計、雲といったもののふるまいを志向的な言葉で語ることもある（「トマトの苗木が日光を欲しがっている」「あの犬は、リスがオークの木の上にいると信じている」といったように）。だが、志向的スタンスがふるまいの予測で本領を発揮するのは、やはりペットでも植物でも時計でも雲でもなく、人に関して予測を立てるときだ。人々はひっきりなしに志向的スタンスでやりとりをしている。そして通常、仲間の人間のふるまいを説明・予測することが非常にうまい。相手を志向的なシステムとみなし、このシステムについて前提を立て、そうした前提にもとづいてふるまいを説明・予測する、この一連の作業にたいへんすぐれているのだ。デネットにいわせれば、これは驚くようなことではない。進化の過程で人は合理的なものとして設計されたのだから。

では対象が非合理であったとき、解釈にはどのような影響が出るだろうか？ デネットの場合、志向的スタンスにもとづいた予測には必ず問題が生じることになる。とはいえ非合理性にはさまざまな形があり、それに応じて対応も変わってくる可能性がある。明らかに誤った知覚的な信念、たとえば幻覚による信念を考えてみよう。デリアはアルコールか薬物のせいで幻覚を見ており、まわりの環境に関して誤った知覚的な信念（例：「目の前にチカチカ光るものがある」）を抱いたとする。このときデリアのふるまいは、アルコールか薬物が視覚にもたらす影響によって説明可能である。彼女のふるまいをうまく説明するためには、知覚のメカニズムに異常が生じていることに言及すればよいのだから、予測したければ志向的スタンスでなく物理的スタンスに立てばよいのだ。

それでは、対象のふるまいが不整合であるとか、自己欺瞞^{ぎまん}的であると見受けられた場合はどうか。デネットによればこうした場合、解釈者は明確ではっきりとした信念・欲求の帰属を行うことができず、予測も不安定になってしまう。メアリーが自己欺瞞に陥っているとしよう。息子のジミーが銀行強盗犯であるはずがない、と彼女は自分にいい聞かせている。だが本当は、ジミーを犯人と示す証拠がたくさんあることを彼女は知っている。息子が重大な犯罪に手を染めたという事実を、彼女は受け入れられないのである。解釈者はメアリーにどちらの信念を帰属すべきだろうか？ ジミーは無実だという信念を帰属したなら、彼女が次に何をするか、信頼に足る予測を行えるだろうか？ 合理性からの逸脱が一時的で、たまにしか起こらないものである場合には、信念と欲求をはっきりしない形とはいえ帰属して暫定的な予測を立てられる。こうしたケースは規則に

とっての例外なのだ。だが、もしふるまいがどこを取っても、そして体系的に非合理であるならば、志向的スタンスではいかなる志向的状态も帰属できず、いかなる予測も立てられない。

(リサ・ボルトロッティ著，鴻浩介訳『非合理性』岩波書店，2019年より抜粋。見出しは省略した。)

※ 常用漢字表にない漢字については，一部ふりがなをつけた。

[設 問]

- A. 課題文に基づき、「志向的スタンスでふるまいを予測すること」とはどういうことか，およびその予測に問題が生じるケースとはどのようなものか，200字以内で説明しなさい。
- B. あなたが電車に乗って席に座っており，隣にも人（以下「甲」とよぶ）が座っているとする。駅に着き，ある人が甲の席の前に立つと，甲が席を立った。課題文に基づき，この甲の行動を志向的スタンスで説明できるような3つの異なる状況を設定し，各々の状況における「席を立つ」という甲の行動の「合理性」について400字以内で説明しなさい。